

採卵鶏の腺胃における T 細胞性リンパ腫

(T-cell lymphoma of proventriculus in laying hen)

沖縄県家畜衛生試験場

奥村 尚子

発生状況：2021年10月8日、孵卵場にてマレック病ワクチン（HVT）を頸部皮下へ接種した初生ひな10,600羽を養鶏場へ導入した。当該鶏群は75日齢の鶏痘ワクチン接種時前後から、通常の約2倍の淘汰率で推移し、2022年1月12日活力低下、沈うつ、あくび様開口呼吸、翼膜や翼内側の痴皮、出血などの翼異常、淘汰羽数の増加が認められ、5羽病性鑑定した。本例はその内の1羽である。

肉眼所見：体温42.0°C、体重約600g。腺胃では、深胃腺の拡張を伴う腺胃壁の水腫肥厚（写真1）、筋胃との移行部付近の漿膜面の出血巣が認められ、腺胃の内容物は茶褐色液状であった。肺は水腫様であった。5羽共通の所見として、嗉囊内容はほとんど認められず、卵巣や卵管は未発達であった。

組織所見：腺胃では、リンパ球様の異型細胞の浸潤・増殖が粘膜固有層から粘膜下組織にかけて、一部筋層や漿膜面の末梢神経内やその周囲に認められ、深胃腺の腺腔は著しく拡張していた（写真2）。異型細胞は小型、類円形～多角形で、豊富な好塩基性細胞質を有し明瞭な核小体を伴う細胞もみられるが、大部分の異型細胞はN/C比が高く、核クロマチンは粗造であった。細胞と核の大小不同があり、核分裂像は高倍率視野に1～5個認められた。抗ヒトCD3マウスモノクローナル抗体（F7.2.38, Gene Tex）及びマレック病ウイルス特異抗原に対するモノクローナル抗体（動衛研）を用いた免疫組織化学的検査（ポリマー法）では粘膜固有層や漿膜面の浸潤異型細胞がCD3陽性（写真2挿入）、抗ニワトリBAFF-Rマウスモノクローナル抗体（2C4, Bio-Rad）では異型細胞は陰性であった。異型細胞の増殖により深胃腺の腺上皮細胞の不整、小型化や剥離、消失し、粘膜固有層や下組織の異型細胞増殖部において、断裂した血管壁や筋板らしき好酸性束状物が散見され、リンパ管拡張や水腫がみられた。上皮が消失した表層管腔面は、出血や偽好酸球やマクロファージの浸潤が認められた。異型細胞の浸潤は坐骨神経内でもみられた。ファブリキウス嚢から総排泄腔の上皮細胞管腔面にクリプトスピリジウム様原虫が多数寄生していた。

解説：腺胃で増殖がみられた異型細胞は、免疫染色でT細胞マーカーであるCD3陽性に染まり、T細胞性リンパ腫であることが明らかになった。本症例以外の4羽についても末梢神経や消化管漿膜面の末梢神経へ異型細胞の浸潤が確認され、鶏群として、鶏のマレック病と診断された。マレック病ウイルス特異抗原に対するモノクローナル抗体（動衛研）を用いた免疫組織化学的検査により、腺胃粘膜固有層に浸潤するリンパ球様細胞は、異型細胞と炎症性リンパ球が混在していた。本鶏群の次に農場へ

入雛した鶏群についても、大雛期に同様のあくび様開口呼吸を認め、検査した結果、頸部の末梢神経へ異型細胞の浸潤が認められ、マレック病と診断された。頸部神経への異型細胞浸潤が開口呼吸の一因と推察された。マレック病の内臓型では、肝臓、脾臓などのリンパ腫とともに、腺胃でのリンパ腫も時にみられるが、本症例のように腺胃のみに著しいリンパ腫を示す症例はまれである。なお、孵化場におけるマレック病生ワクチンの株をCVI988株へ変更し、続発は認められていない。



写真1. 腺胃壁は水腫性肥厚していた。

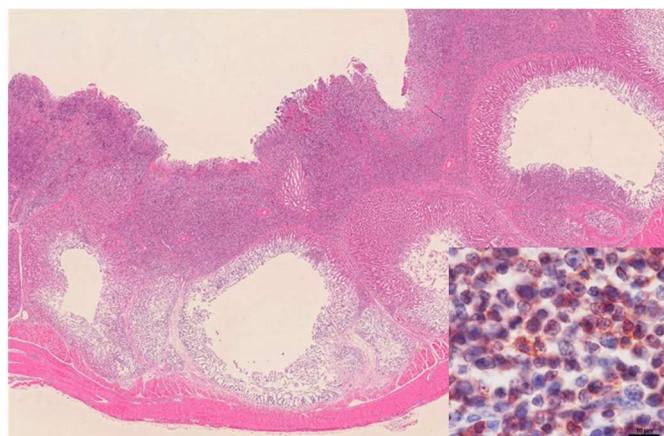


写真2. 腺胃腺上皮から下組織にかけてリンパ球様腫瘍細胞が浸潤増殖し、深部胃腺腔は拡張していた。挿入図：腫瘍細胞は抗CD3抗体陽性を示した。